

第3章 初期キリスト教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか (1)

イエスが来られたのはこうした殻^{から}に覆われたユダヤ教の形式主義のただ中であり、イエスはそこで生き、そして教えられたのだった。力あるメッセージと創造的な教えをもって、イエスは当時の宗教状況を覆い尽くしていた伝統至上の固い殻を突き破り、なおも燻^{くすぶ}っていた活力ある精神的・霊的信仰の残り火を熾^おこして、その勢いを強められた。こうして、残り火がついに生ける火となって、イエスに従う者たちの内に燃え上がったのである。ファリサイ派の主張する考え方とイエスのそれとは、世界を一^{いつ}にして共存しうるものではなかった。それらは全く相反^{あいはん}していたからである。それゆえ、イエスが公^{おおやけ}に活動を始められて間もなく、宗教指導者らがイエスを亡き者にしようとし始めたのも驚くには当たらない。彼らがそうしたのももっともと言えよう。なぜなら、彼らがその代表でもあった、信仰の形式偏重主義と伝統至上主義。それらに終わりを告げる弔鐘^{ちようしょう}を、イエスが打ち鳴らしたからである。

新たな運動 生まれる

イエスは、信仰の本質はなにがしか 律法の外的規範に従うことではなく、神をこの上なく愛し、隣人^{りんじん}を自分のように愛することの内に認められる、と考えられた。しかし、そのような新しい生を生きる力は人の内に見出^{みいだ}されうるものではなかった。「もう一度、新たに生まれる (born again)」ことが必要で、この新生はただ 御自身を信じる信仰を通して生じる、と イエスは言われた。こうして、イエスは行く先々で教えを説き、御自身に自^{みづか}らを委ね、その生き方に従うよう、人々を招かれた。ただそこにこそ、豊かな生に生きる道筋がある、と。こうしたイエスとその教えに対する反応は様々だった。ある人たちはイエスにすっかり心を奪われ、すべてを後^{あと}にして、イエスに従った。しかし、戸惑う人々もいた。また、疑念^{いだ}を抱く人たちもいれば、さらには イエスを激しく憎悪する者たちもいた。

(続く)

(矢野 眞実訳)